

2015年度教師海外研修(エルサルバドル) 研修報告書

学校名	名古屋市稲葉地小学校	氏名	中川 朋子
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

「現地の現状や課題を知ること」、「現地に関する生きた教材を集めてくること」が主な現地研修の目的だった。前者は、青年海外協力隊の活動視察、専門家や在エルサルバドル日本国大使、教育大臣等、様々な立場の方々のお話から、現地の大まかな概要や日本の活動の様子を理解することができた。ホームステイでは、現地の方に自国に対する思いをじっくり聞くことができ、大変貴重な体験となった。また、地道な活動の積み重ねが、日本への信頼の大きな基となっていること、アドバイザーとして現地のニーズに合わせた加工技術や柔軟な対応が求められていることなど、日本の国際協力の実態や現状、課題にも気付くことができた。五感を使って学んだことを、「自分の言葉で」子どもたちに伝えていきたい。後者に関しては、メンバーと協力し、大まかなものは集めることができた。しかし、自分や現地の方も、自分の国の歴史をよく理解していない部分が多く、本当にエルサルバドルを代表するものか分からないものも多かった。事前の勉強不足だと反省した。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

直接触れ合い、考えを伝え合う体験は、何にも代えがたい貴重なものである。そのような出会いが、楽しく明るいものほど、よりその国を身近に感じることができる。ホームステイ体験は、たった一晩ではあったが、現地の方と直接触れ合うことができ、大変有意義な時間となった。特に、国のために勉強しようとする若い人に会い、本当に明るいエネルギーを感じた。一方で、様々な原因が重なり、そのように考えられない人もたくさんいることを知った。しかし、そのような現状を知ったからこそ、希望に向かって進んでいる人の存在がより大きく見えた。明るい未来を信じて努力している姿に感動する心に、国籍は関係ないと思った。また、「一番大切なものは、家族。」エルサルバドル人のどの年代に聞いても、この答えが返ってきた。物ではなく、人を大切にしようという心に好感をもった。肯定的な出会いには、人との触れ合いが欠かせない。子どもたちにも、その楽しさを伝えたいと思った。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ソフト、ハード両面から、日本とのつながりを感じることができた。どの訪問先でも、青年海外協力隊の方々への感謝の言葉が聞かれ、こうした現地の人々との地道な活動の積み重ねが、日本とエルサルバドルを肯定的につないでいるのだと感じた。コーヒー研究所では、「日本は品質の良いものを求める。」というお話をうかがった。その研究所で長年開発された現地オリジナルのコーヒー豆が、日本に輸入され販売されている。研究員の熱心な取り組み姿勢と「より良いものを」という思いは、日本と通ずるものを感じた。

一方、町には日本製の車があふれ、電化製品でも、日本製のものが多く見られた。ドラゴンボールも大人気。現地の子どもたちは、漫画のカードや主人公を描いた自由帳を、笑顔でたくさん見せてくれた。しかし、対日貿易は約80億円以上の赤字。日本製のものが溢れるのは、うれしい気持ちもあるが、相手国にどのような益をもたらしているかは、正直不透明である。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

どこへいっても、ゴミのポイ捨てやマラス（青少年凶悪犯罪集団）の問題が聞かれた。ゴミ問題は、日常習慣に大きく関係している。衛生上の問題だけでなく、すべての活動の非効率を招いている。物事の管理が乱雑なため、無駄が多くなる。経済や産業発展が遅れる理由も、そこにあるのではないかと思った。また、マラスの存在は、個人の力では容易に断ちきれない貧困の負の連鎖を示していた。加えて、教育の貧困や異常気象による作物への被害も聞かれた。これらはすべてエルサルバドル一国で起きている問題ではない。大小関わらず、必ず他国が関わっている。環境や治安問題、これらは、過去日本も経験してきた、あるいは、国を介して現在も続いている問題でもある。自ずと日本の歴史に意識が向いた。日本もかつては世界から支援を受けた事実を忘れてはならない。他国を知ることは、自国を知ること。まずは、私たち教師がそれを学ばねばならないと強く思った。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

年齢問わず、様々な人に学ぶ機会を提供しているところがよい点だと思う。また、専門家から市民レベルまで、幅広い機関や団体と連携して事業を行い、さらに、その成果を日本の地域に還元するというサイクルがすばらしいと思った。また、各国の概要や歴史を勉強する機会の提供があるといいと思った。国の場所や大きさ、言語も含め、小学生にも分かりやすい、基本的な「世界を知ろうブック」のようなものやミニ講座などがもっと身近にあるとよい。リトルワールドの地域ごとのミニ講座のようなイメージだ。（「こんな国だよ。〇〇編」など）また、JICAの知名度をもっと上げるために、青年海外協力隊や専門家などの活動やインタビューを集めた、ドキュメンタリー映画のようなものを作成したり、貸し出しできるようにしたりするのもよいのではないか。今の子どもたちは、ネット動画やゲームに慣れていることも関係しているからか、写真だけでは物足らず、動画などのよりリアル感のあるものを使った方が、理解が早いと感じている。（6）

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [ATS_1253]

◇キャプション：私たちを守ってくれたもの…だけど…

◇解説文：町のあらゆるところで見られた銃。私たちもこれに守られながら移動しました。感謝しつつ、心の中には複雑な感情が常にありました。



●写真2… [TOM_0784]

◇キャプション：未来への希望

◇解説文：長女ウエンディーとの出会いは一生の思い出です。「世界に自国の歴史、長所短所両面を伝えたい。そのために、勉強し先生になる。」彼女の強い意志と飾らない言葉に心が震え、未来への明るい希望をもらいました。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・記録メディアですが、かなり大きいものを持っていった方がいいです。写真もいいですが、帰国後見返してみると、動画の方が断然様子が伝わりやすいと思いました。
- ・現地の言葉での簡単な挨拶の練習。その一言が笑顔を呼びます。
- ・現地の大きな歴史を知っておくこと。なぜその現状になっているかが、分かりやすくなります。
- ・疲れた時の日本食。味噌汁、梅干し、おかゆなど。あると安心します。
- ・荷物の重量制限などは、あらかじめ把握しておいてほうがよい。きれいに入れられても、重量オーバーとなることが多かった。計りを持ってきた方がいたので、大変助かりました。
- ・タイトなスケジュールですが、ざっくばらんな話をする時間をもつことは大切です。ほっと息抜きできる時間や機会を作って、チームで楽しむとよいと思います。

7. その他全般を通じての感想・意見など

「実感の伴った学び」これが、本研修の最大の収穫だった。貧困の負の連鎖、日本と現地を結んでいる様々な活動など、机上で学んだことの現場をこの目で見ると、学びの重みが違った。他国を知ることは自国を知ること。現地のことを知れば知るほど、日本はどうなのかと考える。それが、日本の課題への気付きにもつながる。と同時に、互いの長所短所が見え、国際協力の重要性も見えてくる。「他人事を自分事に」捉える大きなきっかけとなる。帰国後、元スチット隊員の方のお話を聞いた。研修では見えなかったエルサルバドルの現状をいろいろと伺うことができた。現地で学んだがゆえに、隊員の方のお話がさらに心に染みだ。他人事になっていない、私自身の意識が変わっているのに気付かされた瞬間でもあった。今回の研修を通して、JICA、NIEDはじめ、多方面で支えてくださった方々に心から感謝している。次は、学んだことを日本に還元する時。しっかりとその責任を果たしていきたい。

以上